

## 第一章

### オーストリア経済学派の基本的理念

スペインの経済学部で最も不足していたものの一つに、今日まで生徒に対して近代オーストリア経済学の基本的理念の総合かつ完全な観点の講義があげられる。本章ではこの重大な不足部分を補い、オーストリア経済学の基本的な特質を全体的な視点で捉えることで、以降の章で示すその思想の歴史的変化がより理解しやすくなるように努める。そのためにも、今日大学で一般的に教えられている支配的パラダイム（新古典主義）とオーストリア経済理論を対比した基本的な違いがどこにあるのかシンプルで明確に理解できるよう図1.1を用意した。これによって、以降詳細に触れる両者の相違点が一目で把握できると思う。

図1.1

新古典主義とオーストリア経済論の基本的な違い

比較点	オーストリア学経済理論	新古典主義経済論
1. 経済概念（基本的理念）	動的プロセス（行為科学）と考える人間行為学	決定の理論：制限がかけられた最大化（「合理性」の狭義的概念）
2. 方法論の視点	<u>主観的</u>	方法論的個人主義（客観主義者）のステレオタイプ
3. 社会プロセスの主役	<u>創造的企業家</u>	<u>経済人</u>
4. 行為者が <u>先験的</u> に誤る可能性及び企業の利益の性格	利益が得られるチャンスを見出す企業の鋭い洞察力があれば避けられたであろう単純な経営的過ちを犯す可能性も考慮する。	一度決定したことは、コストと利益をもとに判断されていることから、後悔するような過ちを犯すということは考えない。企業の利益は生産によって生みだされる要素の一つだと考える。
5. 情報に対する概念	知識と情報は <u>主観的</u> なものであり、 <u>分散</u> されており、常に <u>変化</u> するものである（企業の創造性）。学術的知識（客観的）と実行的知識（主観的）を完全に区別する。	目的と手段の完全な情報は客観的で <u>不変</u> だと考える。実効的知識（企業的）と学術的知識を区別しない。
6. 対象とするもの：	調整型トレンドを持った全体的なプロセス。ミクロ、マクロの区別はしない：経済問題全ては関連したものとして分析する。	<u>均衡モデル</u> （全体または部分的）。ミクロ・マクロ経済を区別する。
7. 「競争」の概念：	企業的競争プロセス	「完全競争」状態またはモデル
8. コストの概念：	<u>主観的</u> （新たな目的に取り替えられる企業の洞察力による）	客観的であり、一定（第三者が知り、測定することが可能）
9. 形式主義：	主観的時間と人間の創造性につながる <u>口頭ロジック</u> （抽象的、形式的）	<u>数学的形式</u> （時間を考慮しない、一定現象の分析特有の記号言語）
10. 経験的空間との関係	<u>先天的</u> 、 <u>演繹的推論</u> ：完全に区別し、同時に、理論（科学）と歴史（芸術）の調和。歴史は理論を証明できな	仮説（少なくとも修辭学的な）の <u>経験的検証</u>

	い。	
11. 特定予測の可能性	不可能：なぜなら、起こることは、まだ想像していない未来の企業の知識によるから。唯一可能なことは、干渉主義による不協調の結果に関する質的及び理論的な <u>パターン予測</u> だけである。	予測は意図的に見出す目的である。
12. 予測の責任者	企業家	経済アナリスト（ソーシャルエンジニア）
13. パラダイムの現状	この25年間、大いに復活（特に、ケインズ経済の危機及び社会主義の崩壊によって）	危機、 <u>変化</u> が加速している状況
14. 人材投資の量	<u>少数</u> であるが、増加している。	<u>多数</u> であり、分離、分散傾向にある。
15. 投資された人材のタイプ	学際的な理論家、哲学者。急進リベラル派	経済干渉( <u>piecemeal social engineering</u> )の専門家。自由への確約の度合いの変化が大きい
16. 最近の功績	<ul style="list-style-type: none"> <li>・制度的強制（社会主義及び干渉主義）の批評分析</li> <li>・自由銀行論と経済周期論</li> <li>・制度（法、倫理）進化論</li> <li>・企業的機能論</li> <li>・社会正義</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・公共選択論</li> <li>・家計の経済分析</li> <li>・法の経済分析</li> <li>・新古典マクロ経済学</li> <li>・「情報」の経済学 (<u>Economics of information</u>)</li> <li>・新ケインズ経済学</li> </ul>
それぞれの著者	ロスバード、ミーゼス、ハイエク、カーズナー	コース、フリードマン、ベッカー、サミュエルソン、スティグリッツ

### 1.1. 新古典主義の決定理論に対するオーストリア派学的行為理論

オーストリア派では、経済学は決定理論というよりも行為理論であると受け止められ、この点こそが新古典主義派と大きく異なる彼らの特徴の一つとなる。実際、人間の行為の概念は個人の決定の概念をはるかに超越する。第一、オーストリア経済学にとって、行為に対する重要な概念とは、目的及び手段に関する「与えられた」知識における決定の仮説的プロセスだけを含むものではなく、それより、なによりも大事な、新古典主義派が排他的に学ぶ傾向にある経済的配分がその中心の「目的と手段のシステムの概念そのもの」（カーズナー、1998：48）なのである。さらに、オーストリア学派にとって重要なのは、決定することではなく、その決定が人間の行動に移り、そのプロセス（場合によっては完遂できないこともある）の中で一連の相互作用や協調の動きが発生するということであり、この現象こそが彼らの経済学の研究対象となる。故に、オーストリア派の経済学とは、選択や決定に関する理論の統合と表現するには程遠く、むしろ、当事者による企業的活動の中で示される洞察力如何によって多かれ少なかれ調整される社会的相互プロセスに関する理論の集大成だと言える。

ロビンズを由来とする狭い経済理論及び、人間の要求を満たすため代替的に用いられるあまり影響のない手段の使用について研究する学問であるという彼の有名な定義（ロビンズ、1932）に対して、オーストリア派は特に批判的である。ロビンズ概念は目的と手段の与えられた知識を暗黙に想定し、経済問題を想定される制限の中での単なる配分、最大化、最適化といった技術的問題に限定してしまう。つまり、ロビンズの経済思想は新古典主義的パラダイムの核心にたどり着くものであり、今日理解されているオーストリア学的方法論とは全くかけ離れている。事実、ロビンズ派の学者は様々な現象に対して受動的な反応だけするロボットや単なる人の風刺絵のようである。このロビンズ概念に対し、ミーゼス、カーズナー始め、その他オーストリア学派の思想は際立っており、それは、人間は、目的への与えられた手段の配分以上に実際に行うことは常に新たな目的や手段を探し、過去に学びながら未来を発見し構築するために想像力を行使する（行動によって）生き物なのだという考えである。従って、オーストリア派の学者たちにとって経済とは、より一般的な広範囲の、人間の行為に関する総体理論学（人間の選択、決定理論学ではない）の中に統合し包含された科学なのである。ハイエクは次のように述べている。この総合的な人間のアクションの科学にもし「人間行為学上」の名前を付けるとしたら、現在ルードヴィヒ・フォン・ミーゼスによって明確に定められ、普及している名称が最も適していると思う。」（ハイエク、1952a：209）

### 1.2. オーストリア派主観論と新古典派客観論

オーストリア学理論の第二の重要な特徴は、その主観主義にある。オーストリア派経済学の基本的概念は主観的な理念によって構築されており、骨と肉からなる生身の人間が常に全ての社会プロセスの主役であり、それを創造するのだと考える。従って、ミーゼスは

こう述べている。「経済理論は物質的な物ごとに関して語るものではなく、人間そのもの、その感情及び、人間が発する行為について考えるものなのである。資財、商材、富、その他あらゆる行為の概念は自然的要素ではなく、人間の意識や行為によるものなのだ。この世界に入ろうとする者は、外界を忘れ、人間が起こす行動の意義を追及しなければならない。」（ミーゼス、1995：111-112）従って、オーストリア派にとって、新古典派と大きく異なる点は、経済における制限は外界の客観的現象または物質的要素（例えば、石油の貯蓄）によって課されるのではなく、企業的人間の知識（モーターの燃焼爆発の効率を倍増させる化石燃料の発見は、石油そのもの全貯蓄の倍増と同じ経済効果を及ぼす）によるものだということが容易に理解できる。故に、オーストリア派経済理論では生産とは、外的な自然の物理的事象ではなく、むしろ逆に、それは一種の知的で精神的な現象なのだと捉える（ミーゼス、1995：169）。

### 1.3. オーストリア派的企業家と新古典派的経済人

次章の大部分で解説する企業の機能は、オーストリア経済理論の中心の原動力であるが、これに対し、新古典主義経済学ではそれが著しく欠如している。企業の機能は、現実世界特有の現象であり、常に不均衡であり、新古典派が注目する均衡モデルにおいては如何なる役割も果たさない。また、新古典派は、企業の機能は予測される利益とコスト如何で配分される生産要素の一つに過ぎないものだと考え、無意識のうちに、そのように企業家の分析をすることで、解明不可能な理論的矛盾に陥る：予測される利益とコスト次第で企業の資源を求めるということは、企業の機能によって情報が創造される以前に、今日すでにその情報（将来の利益とコストの価格）を持っていることを意味する。要するに、企業家の中心的役割は、後にも解説するように、今まで存在しなかった新しい情報を創造、発見することであり、情報の創造プロセスが発動するまでは、それら情報は存在せず、知ることもしないため、予測される利益とコストに基づいた新古典派のような配分の前持った決定を行うことは誰もできない。

一方、企業の利益は単にリスクの想定から生まれるという考え方に対して、オーストリア派のほぼ全学者は、それは誤りだと主張する。リスクは、逆に、何も生むものではなく、生産プロセスの一コストに過ぎず、企業家が利益を獲得するこれまでになかったチャンスを見出し、それに応じて行動した時発生するだろう純粋な企業の利益とは全く関係ない。（ミーゼス、1995：953-955）

### 1.4. 純粋な企業的過失の可能性（オーストリア派理論）とあらゆる決定における帰納的合理化（新古典派理論）

オーストリア派と新古典派における過失の概念の大きな違いについては、一般的にあまり重視されない。オーストリア学理論では、市場で未だ企業家が発見できていない利益を得るチャンスが常に存在する限り、「純粋な」企業的過失は発生するものだと考える。こ

の過失の可能性こそ、企業家はその存在に気づき排除することで「純粋な企業利益」を生み出せるのである。これに対し新古典派では、後で後悔するような純粋な企業利益の過失の存在は決してないものとする。なぜなら新古典派にとって、全ての決定は、数学的に最大化した、制限された数値をもとにコスト・利益の分析予測をあらかじめ行った合理化によって行われるものだからである。従って、新古典派理論では純粋な企業利益とは、サービスの代償に支払われる生産要素の一要素、あるいはリスクの想定から生まれる一所得に過ぎないものと捉える。

### 1.5. オーストリア派の主観的情報と新古典派の客観的情報

企業家は、基本的に主観的で実用的な、多種多様で言葉で表現し難い新たな情報を常に生み出している（ウエルタ・デ・ソト、1992：52-67、104-110）。こうした情報の主観的概念はオーストリア派の手法論の基本的要素であるが、一方これが、新古典派には全くなく、新古典派は常に情報を客観的に扱おうとする。多くの経済学者は、オーストリア派と新古典派が「情報」という単語を用いる場合、それが全く異なるものであることに気づいていないようである。実際、新古典派にとって、情報は何かの商品が市場で売買されると同じように客観性を持ったものであり、それは最大化の決定を経た結果なのである。しかし、様々な媒体に保存できるこれら「情報」は、オーストリア派から見れば、具体的なある行動において行為者によって、実用的で、重要で、主観的に解釈され、知られ、使用された、主観的性格の情報に他ならない。故に、オーストリア派は、後にも触れるが、情報の発生元であり、その中心的役割を担う企業機能に情報の理論を統合させるという、自分たちが必ず行う作業ができない、スティグリッツをはじめその他の新古典派たちを批判する。また、情報とは常に基本的に主観的なものだということがスティグリッツは理解できていないようであり、彼が言う「不完全な」市場については、「非効率性（新古典派的定義）」を生むというよりも、オーストリア派にとっては、むしろ企業利益が得られる大きなチャンスを生む場であり、そのチャンスは、市場で継続して推し進められる企業調整プロセスにおいて企業家によって発見され、利用されるものなのだ（トムセン、1992）。

### 1.6. オーストリア派の企業調整プロセスと新古典派の均衡モデル

新古典派経済学は自らの均衡モデルにおいて、オーストリア派経済学が重視する企業機能の調整の働きを無視する。実際、この働きによって情報が作られ、伝達されるが、それだけでなく、さらに重要な、社会に現れる不協調の動きに対し調整しようとする力へと発展する。次章でも述べるように、社会の不協調によって全て潜在した利益獲得のチャンスが生み出され、それが企業家によって発見される。企業家がこの絶好の機会に気づくと利益獲得のための行動を起こす。すると、その社会の不協調は消え、自発的な調整のプロセスが発生し、これが、いわゆる、市場の現実経済全体に対する均衡へと向かう動きとな

る。また、この企業的機能の調整的性格こそが、社会プロセスを構築する調整の法則の理論的集約である科学としての経済理論の存在を唯一可能にしているのである。

以上の点から、オーストリア派が競争の動的な概念（いわゆる競争関係のプロセス）を研究しようとしていることを示すのに対し、新古典派は比較的静態（『完全な』競争、独占、『不完全な』競争、あるいは独占化）特有の均衡モデルだけを注視していることが見て取れる。従って、オーストリア派にとっては、均衡モデルを基にした経済学の構築は無意味なものであり、需要と供給の働きを示す重要な全ての情報はすでに「与えられた」ものなのである。なお、オーストリア派は、しばしば均衡に向かおうとするが結局到達しない市場のプロセスについて積極的に研究している。これまでよく議論されてきたのは、それぞれの時代背景においても人間的にも可能な限りしっかり調整された（つまり調和した）知識や文明を無限に創造できる社会的ビッグバンと呼ばれるモデルについてである。これは、社会的調整の企業的プロセスは決して止まることなく、消えて無くなることのないからである。つまり、企業的行為は基本的に新しい情報を作り、伝え、それら情報は社会に属す行為者全ての目的と手段に対する一般的概念を強引に変えてしまうのである。すると、同時に、無限に新たな不協調が発生し、新しい企業的利益のチャンスが生まれ、それを企業家は発見し、調整していくことになる。このような動的プロセスが次から次へと続き、終わることなく、広がり、文明を進展させる。（調整型の社会的ビッグバンのモデル）（ウエルタ・デ・ソト、1992：78-79）

従って、オーストリア派が提起する経済の基本的課題と新古典派が位置付ける研究対象はかなり異なっている。前者は、それぞれの人間が、自発的に起こる調整プロセスに気づくことなく、行動する上で重要だと思ふ目的と手段を探し求める際に新しい情報（故に、既に与えられた「情報」ではない）を企業的に継続して生成する社会調整の動的プロセスを分析する。よって、オーストリア派にとって経済の本質的問題は、新古典派理論が考えるように、手段と目的は既に与えられており、経済問題は単なる最適化の手法の問題であるという、技術的または科学技術的な性質のものではない。つまり、オーストリア派が考える経済の基本的問題とは、既に知られた制限における、既に知られた関数を最大化することではなく、その逆の、厳密に経済的なものである：それは、目的と手段が多く、それぞれが競合している場合に現れ、それらに関する知識は与えられておらず、常に新たに創造され生成される無数の人間の頭の中に散乱していることから、既存する全ての可能性や代案、及びそれらの相対強度さえ知る由もない。

さらに、明らかに単なる最大化や最適化に過ぎないと思えるような人間の行動できえ、その当事者が行動を起こす前に、それぞれの具体的な状況を考慮し、その自動的、機械的、反作用的な一連の行動こそが最も適切だと判断した結果なのだから、そこには必ず企業的な要素が含まれているという事実を理解することが重要である。要するに、新古典派経済学の考え方は、現実社会をもっと全体に深く解明したオーストリア派経済学理論に包含されたあまり重要でない一概念でしかない。

同様に、オーストリア派にとって、新古典派がいつも行うようなマイクロとマクロ経済の区分を極端に切り分けることは無意味なことである。経済問題とは、マイクロとマクロ両面を区別せずに、一体的、相互的に分析するものである。「マイクロ」と「マクロ」の側面を

完全に切り分ける経済学は、現代の政治経済学の入門書や教科書にも見られる最も典型的な誤りの一つであり、それには、ミーゼスやオーストリア派の学者が徹底したような経済問題を一体として取り扱いはなく、いつも二つの異なる分野（「マイクロ経済」と「マクロ経済」）に分けた科学として確立されており、その二つの分野には繋がりは見られない。よって、実際、別々に学ぶことになっている。ミーゼスもうまく説明しているように、このように分断された原因は、概念の使用にあり、一般物価水準のように、主観的理論及び貨幣価値の限界効用理論の応用を無視し、増加単位または限界単位という定義よりも財の全体的な種類または総体という定義で分析が行われた経済科学以前の時代に留まったままの状態にある。このことから、人間行為学とのつながりについての理解は、不可能でなければ、非常に難しい、マクロ経済の集合体に機械的な関係が存在するだろうという前提を基にしたこの「不幸な教義」がなぜ出来上がったのかが分かる（ミーゼス、1995：482）

いずれにせよ、新古典派経済学は均衡モデルを研究対象の中心に据えた。その均衡モデルには、全ての情報は既にあたえられており、それぞれのモデルの様々な変数に完全な調整が成立するという前提がある。オーストリア派の見解によると、新古典派的な手法の最も不適切な部分は、各モデル間の変数や助変数に完全な調整が存在するとなると、様々な経済概念や経済現象の因果関係について間違った結論を導き出しやすくなってしまう。従って、オーストリア派は、均衡が、経済法則に反映される因果関係の真の方角を学者が発見できないように覆うベールのような働きになると言う。新古典派経済学に存在するのは、一方向に向かう法則というよりも、様々な現象における関数的な相互関係（円形）であるが、それら現象の発端（人間の行為）は見えないままであるか、あるいは誰にも注目されない。

### 1.7. コストに対するオーストリア派の主観性と新古典派の客観性

オーストリア派の手法論のもう一つの基本的要素に、コストに対する純粋な主観的概念が挙げられる。多くの学者はこの概念は新古典派の支配的パラダイムの中に違和感なく含むことができると考える。しかしながら、新古典派はコストに対する主観的概念を修辭学的に取り入れるだけで、たとえ「機会のコスト」の概念の重要性に言及しても、結局、それを彼らのモデルの中に客観的に含むことしかなかった。オーストリア派経済学では、コストとは、行為者が目的に対して、ある一連の行動を促す決定をしたとき放棄する主観的な価値だと定義する。つまり、客観的なコストというものは存在せず、コストは、それぞれの行為者の企業的な洞察力によって、その時々状況において継続的に発見されるべきものである。実際、多くの代替的な可能性が気づかれないままになるかもしれないが、一旦企業的に見出されると、行為者によってそれらコストの主観的概念は大きく変化する。従って、目的の価値を決定付けるような客観的なコストは存在せず、現実的には全くその逆で、主観的な価値としてのコストは、行為者が実際に追及する目的が持つ主観的な価値（最終消費財）によって決まる（だから、決定される）。故に、オーストリア派にとっては、生産するために掛かることを覚悟したコストを決定するのは、市場で主観的に反映される最終消費財の価格であり、新古典派のモデルで頻繁に示されるような全く逆の考え方ではない。



### 1.8. オーストリア派の口頭的形式主義と新古典派の数学的形式主義

両派の概念の相違として、経済分析における数学形式的の使用も挙げられる。当初より、オーストリア経済学の創設者、カール・メンガーは、数学的言語ではできない、経済現象の本質 (das Wasen) を捉えられるという口頭の言語の利点について絶えず言及した。実際、1884年、ワルラスに宛てた手紙の中でメンガーは次のように質問している。「数学的手法によって、本質に関する知識にどのように到達できるのだろうか。たとえば、地代、企業利益、労働分配、複本位制などの価値に、、、(ワルラス、1965 : vol. II、3)」新古典派経済学で学ぶ均衡状態を捉えるためには数学的形式主義は特に適しているが、しかし、それには、時間の主観的な現実や、オーストリア派の研究の論証の基本である企業の創造さえも含むことは全くできない。おそらく、ハンス・マイヤーが、経済の数学的形式主義の使用に関する問題点を誰よりも一番うまく纏めているだろう。彼はこう述べている。「本質的には、均衡の数学的理論の中心に内在的な、多かれ少なかれ偽装された作り事が生じる：実際、それら全て、あたかも常に同時に存在しているかのように、生成-因果的数列だけに現れる連立方程式や非同次値によって関係する。こうなると、現実中存在するのは動態的プロセスの場合、静的視点は様々な出来事を同期する。ところが、誰もその独特の性質を排除することなく、生成プロセスを静態だと見なすことはできない(マイヤー、1994 : 92)。

以上のことから、オーストリア派からすれば、消費及び生産に関する新古典派の分析結果や理論の多くは真の経済的な意義が乏しいことが分かる。例えば、いわゆる「価格による加重限界効用均等の法則」の理論的根拠は非常に怪しいものである。実際、この法則は行為者本人が自分の所有している全ての財の効用を同時に評価できることを前提にしており、全ての行為は連続的で創造的であることを無視している。全ての財の限界効用は均等に同時に評価するのではなく、一連の段階と異なる行為において一つ一つ評価するものである。それぞれの限界効用は異なるというだけでなく、比較さえもできない(マイヤー、1994 : 81-83)。要するに、オーストリア派は、時間的及び企業の創造性の視点からすれば、種々雑多な大きさを同期させ、結ぶことから、経済学に数学を用いることは不健全であると考える。故に、オーストリア派にとっては、新古典派の学者たちが使う合理性の公理基準も無意味である。実際、もし行為者がBよりA、CよりBを好む場合、”合理的”、あるいは整合的にならずとも、単に考えを変えただけで(この選択についての行為者の合理的思考にたった0.0数秒費やしただけで)、AよりCを好むかも知れない。つまり、オーストリア派から見れば、新古典派が使う合理性の基準は恒常性の概念と整合性の概念の混同なのである(ミーゼス、1995 : 123-124)。

### 1.9. 理論と経験的空間のつながり：「予測」の概念の異なる認識

経験的空間の相違関係及び、予測の可能性における違いについて、スペインの大学で学ぶオーストリア派と新古典派のパラダイムは対極の構図を表している。確かに、オーストリア派にとっては、社会プロセスの中心となる企業的行為者たち「観察される者たち」が乱雑に創造し、発見し続ける主観的情報を一人の学者、「観察者」が、把握できない事実は経済における経験的理論立証の不可能性を証明している。故に、第五、六章でも学ぶように、これと同じ理由でオーストリア派は、経験主義及び、コスト・利益または最も厳密な定義上の実利主義の分析などは我々の科学では計り知れないものであるという、社会主義の不可能性理論を唱えている。理論の確証のため、あるいは自分たちの指令に調整的な意味合いを与えるために、その都度関係する実用的な重要な情報をいたずらに手に入れようとする者たちがたとえ学者であろうと政治家であろうと問題ではない。もし、そういう情報を得ることが可能なら、強制的命令（社会主義及び干渉主義特有の社会工学）によって社会を調和させるためや、経済理論を経験的に確証するために使われるだろう。しかし、次の4つの理由、第一、それら情報の莫大な量、第二、重要な情報の性質（散乱した、主観的、暗示的）、第三、企業プロセスの動態性（絶え間ない革新的創造プロセスの中で企業家によって未だ生成されていない情報は伝達できない）、第四、強制や独自の科学的「観察（情報の企業の創造を歪めたり、腐敗させたり、遮ったり、単に不可能にしてしまったりする）」の影響によって、理想社会主義、理想実証主義、あるいは厳密な実利主義は、オーストリア経済学理論の視点からすれば成り立たない。

以上の4つの理由は、後に詳しく分析するが、社会主義経済計算の不可能性に関する論争の経緯を説明するとき、経済において特定の予測（つまり、特定の時間と場所の座標及び、具体的な経験的内容に関する）を行うことの理論的不可能性についてのオーストリア派の主張の根拠にも適応できる。明日起きることは今日科学的に知ることはできない。なぜなら、それら大部分は、企業的に未だ生成されていない知識と情報によって成り立つものなので今日知るよしもない。従って、経済では、多くてもできることは一般的な「トレンドの予測」しかなく、これをハイエクは、パターン予測と呼ぶ。これら予測は質的、理論的、相対的な性質だけのものであり、多くても、市場に働く制度的強制（社会主義、干渉主義）が発生させる歪みや不調和の影響の予想でしかない。

また、外界で直接観察できる客観的事実はないことを考慮しなければならず、オーストリア派の主観的概念からすれば、それらは状況に起因し、経済学における研究の対象は、誰かが何かを求め、それを実行しようとする事について抱く考えに他ならない。これら考えは決して直接観察できるものではなく、歴史的な解釈でわずかに行われるものでしかない。歴史が構成する社会現実を理解するには、前もって一つの理論を準備することが必要であり、さらに、客観的ではなく、歴史家によってそれぞれ変わり、その教義（歴史）が真の芸術になる、非科学的な優れた判断（verstehenまたは理解）が求められる。

結局、経験的現象は絶えず変化し、社会的な出来事には助変数や定数など存在せず、全ては「可変」なのであり、そのため従来の計量経済学の目的やあらゆる形式の実証主義方法論プログラム（最も素朴な検証主義から最も洗練されたポッパー的反証主義）を不可能でないにしても複雑にしているのだとオーストリア派経済学者たちは考える。新古典派経済学が掲げる実証主義に対し、オーストリア派は先験的及び演繹的な手段で教義を確立させようとしている。要するに、自明の知識（基本的要素を基に独自の人間行為の主観的概

念のような、あるいは、学者の個人的な科学的経験の自己反省から生まれる、または、誰も自己矛盾することなく議論できないから自明だと考える公理)から論理的-演繹的な全知識の宝庫を完成させようとしている(ホッペ、1995; コールドウェル、1994: 117-138)。この理論的宝庫は、オーストリア派にすれば、社会的空間を構築する複雑な歴史上の現象に一見無関係なその岩漿を適切に解釈するために、また、最低限の一貫性、保証、成功の可能性とともに過去への歴史の作成、あるいは未来への出来事を探求する(企業家特有の使命)ためにも不可欠になる。これで、オーストリア派の学者が一般的に、歴史を教義のように非常に重要視し、それを経済理論と区別し、同時に適切に関連付けようと努めることが理解できる(ミーゼス、1975)。

ハイエクは、社会科学の分野へ自然科学特有の手法を不適切に応用することを「科学主義 (scientism)」と呼んでいる(ハイエク、1952a)。自然界では、数学的言語の適応や研究所での量的実験の実施を可能にする定数及び関数関係が存在する。しかし、オーストリア派の学者にとって、経済学の世界では、物理学、工学技術学、自然科学で起きることとは違って関数関係(よって、需要、供給、コストその他いかなる関数も)は存在しない。集合論によると関数は、数学的に、「像」及び「写像」と呼ばれる要素の二つの集合の対応関係あるいは全単射投影でしかないことを思い出してみよう。では、人間は生まれつき持った想像力によって常に、追及する目的及びそれを得るための手段に関して行動する具体的な状況に応じてその都度新しい情報を創造したり発見したりしているが、経済においては、関数関係が現れるために必要な次の三つの要素のいずれも得られないことは明らかである: a) 元の像の要素はあらかじめ与えられてなく、一定でもない。b) 写像を作る要素はあらかじめ与えられてなく、一定でもない。c) これが最も重要な要素である。両者の像の要素における対応関係はまだ与えられておらず、人間の行為と想像力の結果次第で常に変化する。従って、我々の科学では、また、オーストリア派によると、関数の使用は、全ての社会プロセスの主人公を完全に排除する情報に不変性の想定を挿入することになる: その主人公とは、生まれつき企業的創造力を兼ね備えた人間である。

オーストリア派経済学の偉大な業績は、論理的に時間と想像力(人間行為学)の概念を与えることで、つまり、経済学における研究の目的を形成する全ての社会プロセスの真の、唯一の主人公である人間が本来持つ想像力にそぐわない関数の使用や不変性の想定を用いることなく、経済理論の集大成をまとめ上げることが完全に可能だと証明した事実にある。

新古典派の最も著名な経済学者でさえ、経験的に立証できない重要な経済法則の存在を認めていた(ローゼン、1997)。オーストリア派の経済学者は、経済理論を発展させるにあたって実証研究の不十分さを特に強調していた。実際、実証研究はせいぜい、現実に現れた社会プロセスの結果のいくつかの要素に関する歴史的偶然の何らかの情報を得られたとしても、そのプロセスの形式的な構造に関する情報は得られることはなく、その情報を知ることこそが経済理論研究の目的なのである。言い換えれば、統計及び実証研究はいかなる理論的知識を提供するものではない(そう思わないなら、後にも学ぶように、正に、19世紀のドイツ学派が陥った過ち、及び新古典学派経済学者の大勢と同じ轍を踏むことになる)。さらに、ハイエクがノーベル賞の受諾講演でも明確に示したように、多くの場合、統計用語で測定可能な総計は理論的な意義が乏しく、逆に、超越的な理論的意義を持つ概念の多くは測定することはできず、経験的に扱うことさえできない(ハイエク、1976: 9-32)。

## 1. 10. 結論

オーストリア派の経済学者が新古典主義者に対して行う主な批判及び、同時に彼らの観点の基本的な違いを強調すれば次の通りになる。その一、目的関数と制限に関しては当事者が必要とする情報は「与えられている」と想定した最大化のモデルによる均衡の状態だけに注目する。その二、多くの場合、目的関数及び制限においても自由裁量である変数とパラメーターの選択は、より明白な部分を含み、経験的（論理、習慣、伝統、制度的価値など）に扱うことによって、その他の非常に重要であるが、より困難な部分が見落としがちになる。その三、数学的形式主義で扱う均衡モデルに専念し、因果関係の真実は何であるかを隠す。その四、単なる歴史的現実の解釈にすぎない事実を理論的な結論のレベルに上げることは、何らかの特定の状況では重要になることもあるが、歴史的な偶然の知識が反映されただけだから、普遍的な理論としては有効ではない。

以上の指摘は、新古典主義派の研究によってこれまで導き出された結論が全て間違いだということを意味しない。その中には、回復され、効力を十分持つべき重要な部分もある。オーストリア派が唯一強調したい点は、支配的パラダイムの経済学者が拠り所とする均衡モデルに基づいた経験的手法によって現在隠された習慣と過ちが明らかになったとき、誤った理論（数多くとも）を隔離するには、オーストリア派が推奨する動態的分析を通じた、より実のある確実な方法が不可欠なことから、新古典派経済理論がまとめる結論の有効性については保証がないということである。